東京家政学院筑波女子大学紀要第４集　143～153ページ　2000年

＜研究ノート＞

副専攻日本語教員養成コースにおける日本語教育実習のあり方

金久保紀子

The Role of Practice Teaching in the Course of Japanese Teacher Training Program

Noriko KANAKUBO

Abstract

The purpose of this report is to discuss about the result of the first practice teaching, held at Tsukuba Women's University in the summer of 1999. Forty-five Japanese students divided into five groups at which each group had certain specific program on Japanese language and culture with Taiwan students. According to the analysis and the evaluation on both sides, two findings have been confirmed. First, it is necessary to give more times for training in order to strengthen the students who have high motivation to be Japanese teacher. Second, this practice teaching activity provides an excellent opportunity for cross-cultural communication between Japanese and the other.

キーワード　日本語教師　日本語教育実習　副専攻日本語教員養成コース
異文化間コミュニケーション

１．はじめに

平成11年度、筑波女子大学で初めての「日本語教育実習」が実施された。

まず、日本語教師養成コースの位置づけをまとめておこう。本大学には開学当初から日本語教員養成コースが設置され、そのコースは文部省が1985年に示した「日本語教員養成のための標準的な教育内容」に従い、四年生大学の副専攻[1]（26単位）のコースとしての授業科目をそろえている。

授業科目としては「日本語概論」「日本語教授法」など12科目があるが、全部の科目の仕上げとして「日本語教育実習」が実施され

たわけである。

日本語教育の現状について見てみよう。国内外の日本語学習者は、文化庁（1999）によると国内で83,086人（1998年）、海外で2,091,759人（1998年[2]）となっている。海外の学習者は1993年から30%弱増加したが国内の学習者数は1996年の調査と比べて微増にとどまり、日本語教育機関・施設数は逆に減少した[3]。しかし社会状況の変化に伴い、国内の学習者の多様化は急速に進んでいる。特に都市部でない地域に外国人が居住するケースが増え、それに伴い、子供・主婦といった従来日本語教育ではあまり扱われてこなかった対象者が急増した。

このような状況の中、文部省（1999）は「日本語教員養成課程の在り方」の中で、多様な学習者のニーズに応えるために、日本語教師養成コースでの教育実習の重要性を強調している。

しかし、文部省(1999)には具体的な教育実習の内容は何も示されておらず、実習方法・内容は個々のコースの担当者にまかされているのが現状と言える。実習そのものについては、先行研究も多いとは言えず、その中でも副専攻という性格を含めて検討しているものは非常に少ない。

本稿は初めて実施した日本語教育実習のすべてを計画の段階から振り返り、副専攻の日本語教師養成コースの中での教育実習の果たす役割について、筆者が実習担当者として感じたこと、コースを修了した学生・参加した学習者の評価も手がかりに再検討することを目的としている。

２．日本語教育実習の方針および内容

２．１　実習の目的

日本語教師養成コースをおいている大学は「日本語教育実習」について、どこも問題点を抱えている。一つは学習者の確保であり、一つはその形態であろう。他大学の実習の様子をみると[4]、学内の留学生を学習者に仕立てて実施する、あるいは併設の日本語別科などの留学生を利用する、民間の日本語学校と提携する、日本人学生を海外研修に行かせて、現地の大学などで実習を行う、などに大別でき、副専攻レベルでは実習を行わない、としている大学も少なくない。

実習の計画を進めるに当たり、実習の目的をどこにおくかは大きな問題であった。日本語教師、あるいは予備軍は増えても学習者が思うように増加していない現状を見ると、卒業後の進路としてしっかりとした雇用体制の日本語教師の職を得ることは至難である。また副専攻を履修している学生の意識も、「いずれ教えるチャンスがあれば」「外国人と日本語で話すときの心構えを知りたい」「何となく」などが大半で、職業としての「日本語教師」に必ずしも興味があるわけではないことが事前にわかっていた。

そこで今回の実習では、日本語を教える、あるいは日本の何かを紹介することを通して学習者と体験を共有することを最大の目的とすることを決定した。担当者は学生の自主性を最大限に出すように心がけ、学生には以下の三つを提示した。

1) 異文化間接触としての実習
2) 双方向で学ぶ
3) 体験学習法へのチャレンジ

実習生の人数からすると、十分な活動ができるかどうか不安ではあったが、日本語を介しての交流研修であると位置づけた。

２．２　学習者

実習は実習に協力してくれる外国人学習者（以後、学習者と呼ぶ）がいて初めて成立する。平成11年度の実習に先だって、どこに学習者を求めるかを検討した。

つくば市には学園都市という性格から外国人留学生、研究者、その家族が多く居住して

いる。その地の利を生かして、近隣の外国人を学習者として協力してもらうことも可能であったが、次のような長所・短所が指摘できた。

＜長所＞

・実習中の生活の面倒はみなくてよい
・比較的高い教育を受けた、各国の学習者が集まる

＜短所＞

・面接などを行い学習者の背景を把握する必要がある
・日本語能力・環境の把握をしなければならない
・出席率が下がる場合がある

以上の問題を検討した結果、先方からの申し出もあったことから、台湾の國立台湾大学日本語文学系で日本語を学んでいる女子大生を対象に実習を行うことにした。

台湾大学の学生を学習者とする際、次のような長所が考えられた。

・ある程度均質な学習者が確保できる
・日本語力の予測ができ、準備しやすい
・出席しないなどの危険がない

初めての実習で、実習生に学習者の募集や面接をさせるのは負担が大きいとの判断もあった。結局、先方から女子大生8名が参加することになり、大学内の予算もある程度確保できたことから、10泊11日の日程で、実習を行うことになった。

実際に参加した学習者は日本語を専門とする学科を、平成11年6月に2年ないしは3年修了した学生で、日本語能力試験の級にすると2級から1級程度の実力[5]であった。

かなり等質のバックグラウンドを持つ学習者を確保できたことで、実習生は文化的な違いについても容易に目を向けることができると予想された。

2．3　実習生および助手

実習生は本学で履修しなければならない日本語教師養成コースの26単位のうち、基本的に日本語教育実習以外の科目の履修を3年次までに終えている4年生、45名。この45名は平成10年秋から実習準備を開始した。

また45名を担当者一人で指導するのは限界があったので、筑波大学の大学院で日本語教育を専門にしている助手を2名（準備段階から1名、実習期間中2名）雇った。助手には主に必要な教材の準備、機器の整備、教案の指導などにあたってもらった。

2．4　実習までのスケジュール

実習に至るまでの、主に実習生関係の進行を次に示す。企画委員会とは台湾についての事前の情報を得たり、実習の大まかな内容を決めるために、実習生の中から希望者を募って集まった委員会である。

H10.10	H11年度実習の説明会実施 実習参加意向調査実施
H10.11	企画委員会ミーティング
H11. 1	企画委員会ミーティング 担当実習決定
H11. 2	企画委員会代表者ミーティング
H11. 3	台湾大学担当者へ学習者についての基礎アンケート依頼
H11. 4	実習生全体ミーティング （その後2週間に1度のペースでーティングを持った） 基礎アンケート回収
H11. 6	学習者確定
H11. 7. 2	実習生最終ミーティング

大学内部では国際交流委員会・教務委員会が主に関係していたので、担当者は適宜各委員会に出席し、進行状況の説明・依頼などを行った。

2．5　実習スケジュール　＜資料1＞

台湾大学生の参加が決まった時点で、学習

者にとって来日は実習への協力だけにはとどまらずに、全体として日本での研修という意味を持つことになった。

したがって、実習以外にもいくつかの大学内外での交流・体験行事を設け、学内の学生宅での３泊４日のホームステイも実施した。他に近隣の小学校訪問、大学訪問なども取り入れた。

実習終了翌日の７月16日に全体で反省会を行い、その後グループ毎の反省会を実施した。

３　実習の内容

実習は、１教壇実習、２会話実習、３文化実習の３つに大きく分けた。各人が希望や特技を生かした形で参加できるようなグループ分けにした。

平成11年度開始以降、２週間に1度程度のミーティングをもち、グループ毎のミーティングを重ね、実際の実習は平成11年７月７日から15日までの正味７日間で行われた。

次に各実習の簡単な紹介[6]をする。ここでは内容の善し悪し、反省には特に触れない。

３．１　教壇実習

教壇実習は、実際に教壇に立ち、学習者にとって未習の日本語を教えることを目的とした実習である。事前の調査や台湾大の教員との相談により、敬語を含めた待遇表現[7]を扱うこととした。教案の作成・リハーサルには助手が積極的に介入した。

担当者数：11名
主な内容：全体での自己紹介活動
　待遇表現についての導入
　敬語表現の語彙の確認・文レベルの練習
　自作VTR教材の聴解練習
　ロールプレイ、その発表
時　間：計４時間
教　材：自主作成ビデオ教材、絵カード、
　文字カード、ロールプレイカードなど

３．２　会話実習

全体をインタビュー活動に当て、街頭に出て一般の日本人にインタビューすることにより、様々なタイプの日本語にふれること、また活動のすべてを実習生と学習者がグループ単位で行い、その過程全体を共同で体験することを目的に実施した。準備段階で電子メイルを使ってやりとりし、学習者がインタビューしたい内容をつかんでおいた。

担当者数：14名
主な内容：1) 家族について　2) 恋愛について　3) 結婚について　4) 携帯電話について
　インタビューの質問作成・練習
　街頭でのインタビュー、
　VTRを使っての反省会
時　間：計５時間

３．３　文化実習

文化実習は以下の３つに担当を分けた。

３．３．１　ディスカッション

事前に行った電子メイルによるアンケート調査から1)ファッションについて、2)夫婦別姓について、の2点でディスカッションを行った。

担当者数：５名
主な内容：資料を見せながらの日本の実状について説明、台湾についての質問、グループに分かれての討論（ディベートの形式にはならなかった）、まとめ
用意した資料など：日台両方のアンケート調査の結果、高校生ファッションの実物、日本で流行しているものの展示
時　間：1.5時間

３．３．２　日本文化紹介

茶席をする、という学生からのアイディアをふくらませ、日本の食べ物の紹介と、その

味を表す表現についても触れ、全体として日本文化の紹介とすることにした。

担当者数：８人

主な内容：自作VTRを使ってのオノマトペの紹介、実際に音を出してみる体験（煎餅を食べるなど）、味の表現の紹介と練習、略式茶席（和菓子の紹介、茶席の説明など）

時　間：２時間

３．３．３　つくば市案内

大学内だけでなく、他の地元の様子に触れてもらうために、バスを使っての活動を計画した。

ただ見学をするのではなく、タスクシートを作成し、日本語を使ってその場で日本人に質問をして情報を得る活動にした。

担当者数：６名

主な内容：牛久大仏見学、１年後の自分への手紙、牛久から土浦まで電車で移動、土浦市内での買い物タスク、郵便局利用

時　間：８時間

３．４　発表会

最終日にすべての実習について学習者と実習生が相談して、報告・発表する機会を設けた。合計５つの実習および２つの活動（ホームステイと小学校見学）について、学習者が2つずつ担当し、実習生はその準備とサポートを行った。

司会も実習生・学習者の双方が担当し、発表会の様子は一般の方にも公開した。

４　実習の評価

４．１　実習生の評価

評価は次のような形で行った。

1) 実習生による担当した実習についての評価＜資料２＞

2) 観察者（担当教員・助手など）による評価

3) 学習者からの評価

実習生はこれらの評価を各反省会で検討し、最終レポートを提出した。

日本語教育実習の成績は実習での様子が70%、最終レポートが30%で計算されることになっている。

４．２　台湾学習者からの評価

学習者数が８名と少数であるので、評価を数量的にとらえることは避け、コメント・意見などを中心に質的にまとめることにする。

⑴　全体について

全体的に好意的な回答が目立ち、日本人学生との交流・活動すべてを楽しんでいた様子がうかがえる回答となった。大学としての対応、担当者の対応にも満足してくれたようであるが、滞在する上での移動手段や宿泊先についてはいくつか具体的なリクエストをあげた学習者もいた。

自分たちが考えていたより実習や活動が盛りだくさんで、充実していたと述べ、全員が期待以上であったと答えた。この経験は日本語の勉強のみならず、日本人を理解するため、あるいは将来自分が日本語教師になるための経験として高い評価をしている学習者が多かった。今後もこの交流活動を続けていくことを期待している。

また、実習への協力ということで、自分たちが実験に利用されているような印象を始め持った学習者もいたようであるが、日がたつにつれて解消された、と回答した。

⑵　実習の時期・期間・費用について

台湾大の夏休みに入ってからの今回の日程はちょうどいいと全員が答えたが、10泊11日という期間は短いと指摘する学習者が大半であった。２週間程度を希望しているようである。一方、費用については、大学としてある

程度の補助は行ったつもりであるが、なお高いとの回答も少数ながらあった。

⑶　各実習・活動について

台湾の人たちの性格によるのか、各実習・活動に「あまりよくなかった」「つまらなかった」と回答した学習者はほとんどいなかった。唯一、大学内の講義を聴講する活動は、流れのある講義に突然参加したことで、日本語や内容が理解できなかったという理由で、評価が高くなかった。

各実習については、学習者によって多少ばらつきがあるが、一般の日本人にインタビューする活動、茶席、ディスカッション、買い物タスクなど、具体的な目的や視覚的な補助を伴う活動への評価が特に高かった。特に一般の日本人と話す機会があった活動を好んでいたようである。教壇実習グループが取り組んだ待遇表現や、オノマトペなどは、内容として既習であった学習者もいて、評価をする際にはその教え方や教材の使い方が参考になったとする意見も見られた。

さらに、まとめとして行った実習発表会への意見も多く、自分がやってきたことを振り返るよい機会であったと述べている。

また、他の活動で一番好評であったのはやはりホームステイであった。多くの学習者は実習生の自宅に行き、３泊４日のホームステイをそれぞれ楽しんだようで、初めて日本人・日本語だけの環境になれたことを貴重な体験としてとらえている。

⑷　実習生に対して

台湾大でも現地の日本人との会話練習などを積極的に行っているようであるが、全く同じような立場・年齢の日本人と深く交流した経験はなかったらしく、実習生たちといろいろな形で体験を共有できたことに満足している。担当者が個別に印象などを聞いた際も、実習生や他の大学内の学生とのコミュニケーションが楽しいと話していた。期間中特筆すべきトラブルは何もなかったそうである。

４．３　日本人実習生からの評価

⑴　全体について

実習が終わって１ヶ月ほどしてからの評価であったが、実習そのものには充実感を感じている実習生が大半である。準備の難しさ、共同作業の難しさを感じつつも、台湾からの学習者と知り合えたことを素直に喜んでいる様子がうかがえた。

実習は副専攻コースの仕上げとして不可欠で、後輩にも積極的に参加するよう勧めたいという意見が多く寄せられた。

副専攻コースの他の科目との関わりは、「日本語教授法」が一番強いと答えたが、実習の内容によっては視聴覚教育教授法、文法、音声、教材論の授業をあげる実習生もいた。

⑵　実習の時期・期間・実習費について

実習生にとっては、前期の終了時期で、履修している科目をいくつか休んでの参加となった。台湾大の夏休み、こちらの学年歴を考えると他の期間での実施は困難であったので、今回はこの時期に設定した。就職活動中の実習生が多く、ミーティングに欠席するケースが多かったのは大きな問題であった。正味７日という期間は短いと感じている学生が多いようである。

実習費（￥4,000）を徴収したが、金額はちょうどいいと答えた実習生がほとんどであった。

⑶　担当実習の時間について

８割以上の実習生が、担当の時間が短かったと感じている。そのために考えていたこと、計画していたことが十分に行えなかった、あるいは教える経験を十分に持てなかったことを残念に思っている学生が多いようである。

特に、教壇実習に参加した実習生がこのような感想を強く持っている。

時間の短さから、学習者に実習の内容が役に立ったかどうか不安に感じている実習生も多い。

⑷　教材・教具について

必要な文具などには支障はなかったようであるが、ビデオカメラをはじめとする機器類にはいくつかトラブルがあった。機器の整備も実習生の仕事であるという認識が足りなかったという意見もあった。

VTR教材や絵カードを自作したグループも多かったが、その際に必要なものはそろっていたと答えた。

⑸　実習中の担当者・助手について

実習に助手がいたことは大変心強いことだったようで、担当者一人では指導しきれない細かい情報を助手から得ることができたと答えている。

実習前のミーティングの際に自分の実習の内容をよく把握していなかったため、担当者と十分に話し合うことができなかったという実習生もいた。

⑹　期間中の学習者とのコミュニケーション

実習の内容によっては、極端に学習者との接触が少ない実習もあった（例：茶席）。台湾からの学習者の日本語レベルの高さに驚きつつ、何を話したらよいのかわからずに戸惑いがあったという意見もある。

台湾からの参加者が日本や日本の文化、流行について詳しく知っていることを驚いている実習生が非常に多かった。また、台湾について深く知らなかった実習生も多かったが、実習後、台湾を身近に感じるようになった、あるいは台湾に興味を持つようになった、今後も交流を続けたいという回答も目立った。

5　まとめと反省

⑴　実習期間の短さに関する問題

担当者として実習を経験して持った一番の印象は、この実習は全体として交流研修という位置づけであるので、「日本語教師になるための実習」という意味合いは非常に弱いものである、ということだ。多い実習生でもグループで３時間程度しか与えられないのでは、教員養成という性格は持ちようがない。実習生から寄せられた「担当時間が少なすぎるという不満はもっともで、用意した内容を未消化、あるいは複数回担当することによる改善をできないままで実習が終わってしまうことは非常に残念であった。さらに少数ながら卒業後の進路を日本語教育に求めようとする実習生には十分な時間的な余裕のなさから、訓練としての実習ができなかったことは大きな問題である。

この問題を解消するためには、この実習以外にも何らかの日本語教育体験を希望者には持たせる方向で動く必要がある。たとえば石田（1998）の試みのように、電子メイルを使っての日常的な作文指導を通しての訓練、または担当教員が介入した上での近隣在住の外国人を対象にした個人や少人数のグループ単位での継続的な日本語教育を担当させる、などの工夫が必要であろう。また経済的な問題は大きいものの、海外の大学や高校での実習研修なども可能性としてはあると思われる[8]。

こういった対策を講じなければ、当大学の副専攻修了者からきちんとした日本語教師は輩出できないと考える。

また、来年度以降もしばらくは同様の形態での実習を行う予定であるが、実習生の希望によっては担当の重みに差を付けることも検討課題である。つまり日本語教育への関心が高い実習生には多くの担当を課す措置である。

⑵　副専攻コースと実習の関係

実習は副専攻コースの仕上げとして不可欠であるという結論は容易に得ることができる。しかし、どういう形態が適当であるのか、また先に検討したように、どの程度の時間を費やすべきであるのか、という問題は残ったままである。

反面、当大学の副専攻コースを履修している学生の日本語教育への関心を考慮すると、まず体験することが重要であるという計画当初の認識は誤りではなかった。他大学でも同様であろうが、「将来の何らかの機会のために」という非常に漠然とした意識で参加している学生が大半であるので、時間的に短いと感じるくらいが適当であるという判断も可能であろう。

ただ、準備段階から積極的に関わらせ、自分の特技を生かした実習、自分たちの日常を自分たちで語れるような実習を考えることは非常に重要である。なぜなら、今後の日本社会での外国人との日常的な接触を考えたとき、そこにはいわゆる国際交流といった悠長なコミュニケーションではなく、いかに外国人とうまくやっていくか、という視点が養われるべきだと考えるからである。自分の日常、考え方、ひいては文化をいかに提示するか、切り取ってわかりやすく見せるか、その過程を実習で体験する必要性を強く感じた。外国人は茶道や華道にばかり興味があるわけではないが、もし自分たちで茶席を設けることができるのであれば、どうそれを見せるか、どう説明するか、などを実習という機会を使って体験しておけば、その後の様々な方面に応用できるはずである。

また、職業としての日本語教師の現在の社会的な立場は必ずしも安定していない。現在のところ日本語教師には国家資格がなく、㈶日本国際教育協会が実施する文部大臣認定の「日本語教育能力検定試験」が唯一の資格に準じる試験として存在しているだけである。このような現状のなか、日本語教師の仕事を理解し、その難しさ、楽しさを実感する機会を持った人材が増えることは、日本語教育の底辺を広げる作業として、時間はかかるかもしれないが、有効であると考える。

⑶　交流研修としての成果

前章の評価を検討すると、全体として交流活動はスムーズに運営できたこと、交流そのものを実習生・学習者双方が好意的にとらえていることは明らかである。

その理由として考えられるのは当大学が少規模の大学であったこと、実習生や他の女子大生が交流と構えずに日常の延長として学習者を迎える態度が見られたこと、実習生・学習者が同年代であったこと、などである。台湾は日本とは地理的には近いが、実習生たちにとってはあまり馴染みがなく当初は交流という点で不安もあったが、杞憂に終わった。

大学レベルで考えても、このような交流先を互いに得たことは収穫があったと考える。1年で終わらせてしまうのではなく、できる限り息の長い交流を行う必要を感じる。

当大学の学生について考えれば、外国人との接触はつくばという土地柄、日常的に行われてはいるが、接触のほとんどは、会ったときに話す程度で、それ以上の関係ではない。特に何かの活動を共同で行うといった経験を持っている学生は少ない。今回は日本人学生同士、また学習者と話し合い、進行すべき活動がほとんどであったので、その共同作業の難しさを痛感した、というような感想を多く得ることができ、またそれがよかったという意見も多かった。共同作業を通して、考え方の違い、行動様式の差などを自身の体験として認識したことは、いわゆる異文化間コミュニケーションの入り口にふさわしかったと考える。

共同体験を重視した実習であったが、その目的は十分に達成できた。

＜注＞

1. 日本語教師養成コースを持っている大学は、平成7年の文部省国語課の調査によると大学で67校となっている。しかし本大学もこの調査以降に副専攻コースを始めたことからも、現在はかなり増えていると予想される。
2. 国際交流基金調べ、ただし平成11年5月現在の仮集計値
3. 国内の日本語教育機関・施設数は、1996年の調査では1,658、1998年は1,592。
4. アルク地球人ムック(1994)pp.172-181、イカロス出版(1998)pp.222-237
5. 台湾大学の引率教員服部美貴先生の判断による。
6. 詳しい内容については学生の最終レポートをまとめた報告書を作成する予定。
7. 話し手や書き手が人間関係への心配りのもとで話したり書いたりすること、その言語表現、文、語句。(『日本語教育辞典』p.226大修館書店(1983))
8. ただし海外での研修を義務づけることは、単位を出す科目としては経済的な負担を考えると不可能であろう。

＜謝辞＞

この実習を実施するに当たり、台湾大学の服部美貴先生を始め、筑波女子大学の先生方や各委員会のご協力をいただいた。また計画の段階から教務課の皆さんには本当にお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。

＜参考文献＞

実習中に参考にしたものも含む。

1. 安場淳他（1991）『異文化適応教育と日本語教育１体験学習法の試み』凡人社
2. 石田敏子（1998）『コンピュータ通信を利用した日本語通信教育及び教師養成のための試行的研究』文部省科研費研究成果報告書
3. 岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習―理論と実践―』アルク
4. アルク地球人ムック（1994）『日本語教師読本』アルク
5. イカロス出版（1998）『日本語教師になるための本‘99』イカロス出版
6. 拓殖大学言語文化研究所（1998）『日本語教師養成 u 座「教育実習」10年の報告』拓殖大学言語文化研究所
7. 文部省（1999）『今後の日本語教育施策の推進について－日本語教育の新たな展開を目指して－』今後の日本語教育施策の推進に関する調査研究協力者会議
8. 文化庁（1999）平成11年度『日本語教育研究協議会』資料

＜資料１＞

日時	内　　容	日時	内　　容
7/6 火	来日　バスで移動 筑波研修センター泊	7/12 月 9:00 12:00 13:00 16:00	 ホームステイ先から大学へ 実習④　インタビュー活動 昼食 講義体験① 3限金久保の講義　4限その他 研修センター泊
7/7 水 10:00 11:00 12:00 13:00 16:00	 開講式 オリエンテーション 昼食 実習①　自己紹介活動など 学長主催レセプション 研修センター泊	7/13 火 9:00 12:00 13:00	 実習⑤ドラマ活動他 昼食　女子大食堂 吾妻小学校訪問・授業見学 1:45～2:30　5時間目 研修センター泊
7/8 木 9:00 12:00 13:00 16:00	 実習②ディスカッション・茶席 昼食 筑波大研修：留学生との交流会 研修センター泊	7/14 水※ 9:00 12:00 13:00	 講義体験② 昼食 自由行動 研修センター泊
7/9 金 9:00	 実習③　全日つくば案内 ＜ホームステイ＞ 7/10 土～7/12 月　朝まで	7/15 木 9:00 12:00 13:00 15:00 16:00	 実習⑥　発表準備 昼食 実習⑦　発表会 実習の成果発表し公開する 閉講式 学生主催　お別れ会 研修センター泊

※　7/14 は悪天候のため大学全体の講義が休講となり、終日自由行動となった。

＜資料２＞

日本語教育実習 99

授業評価表
＜担当者用＞

99年7月　日（　）　時　分～　時　分			担当者
学習項目			
学習目標			
	評価項目	評価	コメント
授業全体	目標の達成	5 4 3 2 1	
	全体の時間配分	5 4 3 2 1	
	クラスの雰囲気	5 4 3 2 1	
授業の流れ	前の授業との流れ	5 4 3 2 1	
	導入	5 4 3 2 1	
	練習	5 4 3 2 1	
	まとめ	5 4 3 2 1	
	授業の一貫性	5 4 3 2 1	

教師の行動	教師の発話（大きさ・スピード）	5 4 3 2 1	
	教師の位置・移動	5 4 3 2 1	
	身振り・手振り	5 4 3 2 1	
	評価項目	評価	コメント
学習者への配慮	理解度の把握	5 4 3 2 1	
	進め方のスピード	5 4 3 2 1	
	適切な対応	5 4 3 2 1	
	教具の適切さ	5 4 3 2 1	
学習者の雰囲気	積極性・反応	5 4 3 2 1	
	協調性	5 4 3 2 1	
	理解度	5 4 3 2 1	
	集中度	5 4 3 2 1	

＜その雰囲気が付いたこと・難しかったこと＞